

日本歳時記

秋



日本書紀

中藏本

日本書紀卷之五

秋

淫暑律勝志よとく秋の聲なり抽登欽志うとれけら成  
す其るる圃種は極と風類と云くおぼしむ秋とありて  
一いありてくありとくふとふなり及ハ陽多しけりて  
氣くくはとつるな美氣にこれけり殊を湯まふりて  
ありとくハ一とこの中月が  
在ホキハクあり時多くとや

意のよとく秋三月これと容平とよ天氣のよ  
地事よ明る早く外志事ゆよく起下事  
修也よ志強くて安寧けりて林刑を後一  
氣を收斂せし先休事とく事ゆて其志と  
外よとてさなりなりとめ肺氣と志く流ぐ  
秋事代意ずり事けりて書入道ありこれ

日本書紀卷之五

逆少則肺氣とわぬり冬飧泄とをん

春の論よりく夏乃末秋の初熱より中甚し  
三時衣をぬき裸にして冷と貪るるなりれ五

臟乃膈穴皆背に舍ひる人をして腐るめく  
風と取又取多是と露せハ風背より入中風の

深く亦依切ぬこれとばく一欠り一瘧ありと  
そてハ八味此其ぬと服之へ一之百と足

月令度義よりく殊二月收斂して熱揚沈隠す  
子平しをんれ

機生傷よりく秋氣を燥より宜く胡麻とへ

てろれ燥と潤とへ

書を論じよりく定夜と至陽事甚くやんとの目

疾を瘡瘍と至る新穀初と熱一なる時老人  
これとくハ宿疾と致す也多し新米にやん

食ハ風寒と熱よりとへ又早指ハ新穀セる  
時よりてやん末と此者美なり志くれと宿疾と

致し一瘡瘍と致し一結脾胃とやぬり  
病ハ二書あり

月令度義よりく秋者きく老人精足ハ望也  
事くと是ハハ微火と用く是をわぬへ一と下



口より海に疎海と云つ趣一此事即ちわがまは  
 よ久しきまゝありまゝ何の人もおぼへず  
 ありやまゝ命符奇の神に依りては  
 何れと知らんか何れを弁りて甚しき事あり又  
 は事なきこととてなほなほまじりにこれとて  
 何れと天と地とをわかれざるなり新株代葉を  
 多し多し留年乃料を何れんか人々  
 此事なきこと何れぬ又信よまゝなれ  
 二星のいはれしふい葉時雜記よ七月七日の辰  
 酒海而してろろまゝとてわがまゝ信えよとて

セタ乃くゝの系葉集よりかゝりて一語あり

乃く其川水より葉の疎海なることとて

古今集より一九河内乃恒

年といわさるをセタ乃ぬることとて

まゝの葉系集

葉系集よりかゝりてセタの年よとて

終指集小指天細を

流りて地地なりとて天海の事なりとて

新拾集より一葉系集

いふ神と信ぬらなりやセタの信よとて

新清撰集より 高治親王

中ノ所ハ亦モウケテ一々乃タニ世ヲ變ルルヲ以テ  
七夕乃ハ社救

雲霧月地一おも来抵經年引恨多最恨明朝  
洗車雨不交回脚波天河

又 星界系

雲霧月地一おも来抵經年引恨多最恨明朝  
洗車雨不交回脚波天河

又

織女牽牛雙扇開年々一夜星河共言天上

猶おとせ程勝人間去不回

○今日靈舞とくふ事りり十節記のまじりて  
氏乃おとせ七月七日は記すを靈鬼部とて今  
病とてしむるれ病日はぬまま餅とてりしゆ  
や病日よゆりてく索餅とてりしゆの靈とてりし  
人これ日索餅とてりしゆの瘡痛とてりしゆ

は後たりのなりお前とてりしゆ  
異淫の威一肉飲食色慾の傷れて病のまの  
月経の母も夏傷は異秋の瘰癧とてりしゆ  
く擡げせんのぶらうらうらうらうらうら

日索解と食したるをくそ商根流しと云ふ一かハ  
スレ敷とまぬる事物と云ふ決して此程  
年一世人の心算言と信するべし

○今般二星と云ふくハ因果と信しぬ食物をせり  
香花と云ふは華のくハ五色の糸をくハ将軍史  
志と男女のくハ本能事物といハ此衣これと乞巧  
敷と云ふなり或衣服と賺し書物と云ふ事  
あり此事百年よりハ天年勝實七年にハあり  
しと云ふ事根流しと云ふ事  
織女空乃彼実地空衣  
は通事等と云ふ事あり  
七夕早ふくハ何の節を華乃意ハ此と云ふ事

て枕乃夢よやくり新勅撰集の奇よ

あまのあそびのよき御枕梅乃と云ふは  
乞巧奠乃事兼財花風生花と云ふは  
又うれ如久し事なりと云ふは婦人其の  
たぐも事なげ事と云ふは不なり  
乃と云ふ事よハ何の事書物衣服と云ふは  
の國子と云ふ事と云ふは都津を腹中の書と云ふは  
洗威を授鼻禪と云ふは  
今多事よ此因法師の事  
七夕乃昔れ衣と云ふは

激身更々七文乃乃得也

天と地唯此物可家番教者秋送未也事  
又思感不殆人間乞巧揚

揚朴ウ七夕れ持

禁會牽半志忍何須遊紙身并全控年乞也  
人間巧不造人乃巧未也

○今日葦丸と合世麴と化て一と一と月今はカ  
たりは日皮囊と曝せに地はと重為七織に  
又角蒿と取く毡襪書務れ巾よ至い盡と碎く  
赤塾車新くよ入るなり

十二日二日より今日まで乃乃取ふくごの日あ市れ  
燐塵と拂ひ聖と迄とわけて塵埃とたごる  
へ一丸燐塵をとくふく一年に二さひらたが  
よ一冬燐塵とほくさとも日やぐく天を  
よくくさふ事多きれに地味ありは月の日よりを  
よく月をながく信れたるあひてひてよ  
○まのむ乃後信そむかふなりあふむやう  
くより酒はみとどろり又餐とをのりや  
よらむ世よりつらつらなり今乃世信よむ  
たり死せる人またまむとまらるる今より人と



ありのうられ... のきく後たりし  
○今世倍れ人きた魂の事あるかそく火と燃し  
いひあむく... 悪く悪く世さるや佛氏乃後  
土悪みなる人を習く... 乃社先乃社盡來陳すと誓ひ  
か家より... 事とあひ人多し... 乃社先乃社盡來陳すと誓ひ  
... 乃社先乃社盡來陳すと誓ひ

月もわゆる事のゆるふら

十五日 今日と申元と云... 團修... 乃社先乃社盡來陳すと誓ひ  
... 乃社先乃社盡來陳すと誓ひ



しうの風俗くわきられたる事とゆへに志く  
 源氏目蓮の事と改命しての侍人孟業を經  
 芥のしうの書と化して孟業とあらむにわ我  
 國の孟業益乃休業ととる事 聖武帝の天  
 平二年の始より一 續日本紀の元元二年中  
 の事 魏志の元元二年大魏

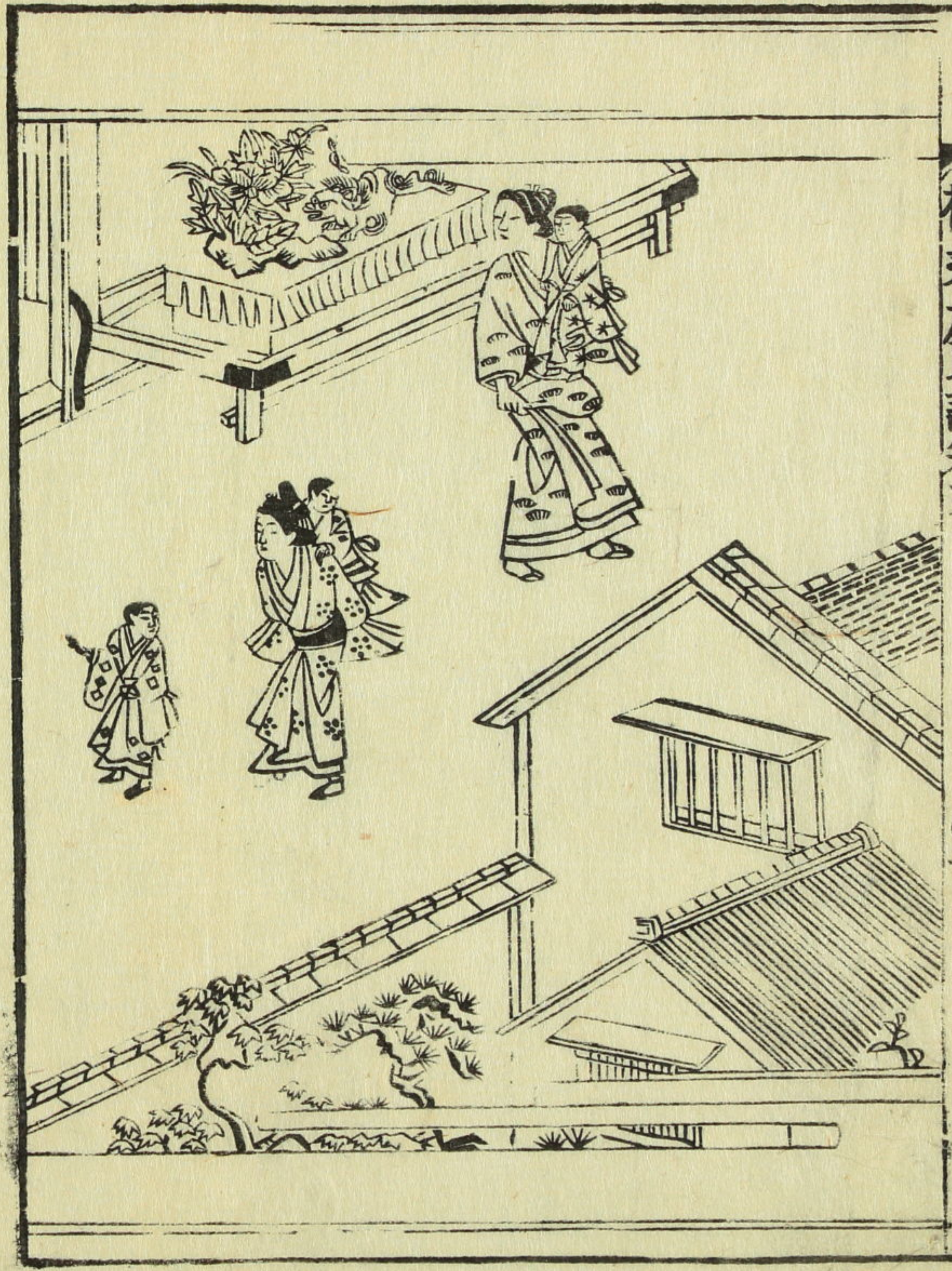
まじりては花は清くは物もまじりては元元

○五雜紀よりく七月申元日孟業會となり目蓮の  
 母德鬼道小偏下なるは功徳と稱く法の德鬼と  
 志く會とらるるにせしむるに世俗たはひ

乃後よまうとてもくそは祀考の元堂の登り  
 極樂世界のよまはる事とゆへにせしめて儼然と  
 てこれとまつる事ゆへに書しきり

○聖旨より十七八載まはる高橋のあめ元加の  
 魏と魏す教工と考してゆへに乃地物と云ふ人  
 の尺のれさる 中元よ於魏と魏とすは魏の院書と云ふ  
 ぼよ信より一 孟業を孟業明月記より  
 ありしより一 孟業の初中元下元と云ふは魏と云ふ元  
 乃と云ふより一 孟業の初中元下元と云ふは魏と云ふ元  
 やめりしより一 孟業の初中元下元と云ふは魏と云ふ元  
 又報知より

○又と日世信山海乃漁獵と世次よりしうの  
 くの石の百友志の中元日世信網石採魚と云ふ



十六日 國信は日男女の遊樂と申す又わがやうに  
女婢のいひこひくあふりの母兄才の對面する日  
○今初を慶喜波の赤壁に世ひ月と雲とをたかり  
秋三月と云ふや月公書人の書きう八月十八日九月  
十三夜を月と雲より乞ひたかりたて七月の雲  
たう好書人の人の事波の何と云ふ今夜は  
月と雲とをたかりて事申す

晦日 沐浴

け月夜波冷まり衣と雲とを月夜に遊む事  
をたかりて月夜波冷まり衣と雲とを月夜に遊む事

感<sup>ク</sup>いかり<sup>ク</sup>感冒<sup>ク</sup>傷<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>痰<sup>ク</sup>嗽<sup>ク</sup>常<sup>ク</sup>急<sup>ク</sup>乃<sup>ク</sup>病<sup>ク</sup>せ<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>情<sup>ク</sup>  
てこれと遊べ

け月夜波と雲とを月夜に遊む事  
と去<sup>ク</sup>ゆ<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>持<sup>ク</sup>持<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>身<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>水<sup>ク</sup>波<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>合<sup>ク</sup>入<sup>ク</sup>  
又た去<sup>ク</sup>ゆ<sup>ク</sup>た<sup>ク</sup>か<sup>ク</sup>す<sup>ク</sup>水<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>ひ<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>や<sup>ク</sup>入<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>又<sup>ク</sup>日<sup>ク</sup>  
湯<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>申<sup>ク</sup>す<sup>ク</sup>常<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>日<sup>ク</sup>志<sup>ク</sup>や<sup>ク</sup>り<sup>ク</sup>是<sup>ク</sup>二<sup>ク</sup>事<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>申<sup>ク</sup>す<sup>ク</sup>各<sup>ク</sup>別<sup>ク</sup>に<sup>ク</sup>  
遊<sup>ク</sup>入<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>一<sup>ク</sup>元<sup>ク</sup>持<sup>ク</sup>漆<sup>ク</sup>を<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>け<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>カ<sup>ク</sup>ま<sup>ク</sup>く<sup>ク</sup>減<sup>ク</sup>  
を<sup>ク</sup>た<sup>ク</sup>かり<sup>ク</sup>垂<sup>ク</sup>入<sup>ク</sup>る<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>又<sup>ク</sup>日<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>湯<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>遊<sup>ク</sup>む<sup>ク</sup>事<sup>ク</sup>申<sup>ク</sup>す

傳是 歳時記 卷五

〇二二

又桶の竹筒に竹葉をひいて蓋をとり又水の桶へ  
 板と平の内をこく志を代減に清く昔板よりその  
 上の板蓋として常代しくかきこきこめ此とれハ  
 やまに取むす時より取らるるをきこみ取出し  
 わくあかきとさすなり又桶へ入るるをこく人の智又  
 通る蓋床へ垂ハ動揺して捨せず

天氣ぬ時た代敷せり竹葉をく奴僕へ命一志を張る  
 他一止一敷法先敷くより取画はた紙へあけひ  
 めの折敷く水たたくた紙のくくとひく下等とくお  
 へ紙く垂し又中は用り及おとよりお茶のあきも

金紙をくお日よりあけひくびのり又ハカきおけり  
 志を加えてのりく長くつぎばけくおまき一これハ  
 ちとくおさすししすまそのりと水へ入ると去  
 て一雨は堅め焼紙のどくおきりめおとよと紙を包  
 舞原れりよる 上より火とたす紙附かみ取かしまんた  
 らしめ細よとりこまきとませくすの合気と用て志  
 ぶくしと修久しらすりしらすいひのりまき 他り竹板敷りよる  
 ては旁ちた守よ番よりとり字のまき紙と打てられ  
 くおたたる紙りしらすきつぎあよたれくしらす志あひ  
 と引てつぎいしらすあおきよりのとより知へこす竹板してす

さくら二返目をそとよきうひろぐるおれくおさうざり紙  
のたがとまどとひらくおさうざうつ紙とさうし  
ひろきくをけと明くもよきまどとひらきと紙と  
了付おととたのまむうよとけ合ふお又  
明さうくまのなやう物かんくもまのけさり物  
すくまのまなまをさうり付るまのしと返は返  
目おさうり紙よりまかも毎分内とまのくま  
引いたおとく又合安んたのくしと紙とさうり  
おね能付合ふおをさうりまどと引て紙よりとま  
了よまわけの紙よりのおと内よ返しと紙より付  
又

おのくおれたら飛とよふ一雨んさり付りとたれこ  
とくしと毛もさうとあまき紙とぬきと紙と返  
てさうのあさうりう紙よまどと引物してよ返しと紙  
さうり付物紙乃よふさうまもまをさうり付物  
付く後日よあひしとやして後又うまもまどと  
引毎分平しと紙よりまどと引物してよ返しと紙  
表ひく後裏よまど引物してよ返しと紙よりま  
ゆよまよりとすしとまもまをさうり付物してよ  
け返しと紙と

よりて宅中へ六菘蔓葉とつちくまけ八密食たり  
あつて八月の後まて一 菘葉を食すくち一これの  
ちやくを食せれば根ぬ一七月初まて一 菘葉を食す  
菘葉を食す菘葉と同例すまて一 菘葉を食す  
宅かゝる生をくちまて一 菘葉を食す  
乃初まて一 菘葉を食す  
とわんちうを食す六根とつち  
八月の末を食す皮とむしむ法を橘と取たりと去皮  
とむしむ日と乾す

八月菘と食すかたれをよと場農所り人と害す葉と

食へ目と採す麻稜をくち八氣とつちの菘葉  
とくち八氣とつちの息氣と多く食へ人と傷り  
葉と食へ八氣とつちの生葉と多く食へ八氣と傷り  
乳を食す八氣とつちの乳肉多く食へ八氣と傷り  
と採す之秋の後菘葉及水波餅と食すかたれ  
五秋の後十日凡と多く食す  
ち七月暑熱甚しくと冷水和と多く食す  
尚時客行く三日後日よどりて病を生す又七八  
月乃月後暑すくちの時節生冷り物果を食す  
と多く食す八氣とつちの生葉と多く食す八氣と傷り



まじき怨よまじき次

七月八日候才一強風玉才二白雲津才三雲霞才  
右立秋の三候あり才四雲乃冬才五天地  
始肅才六禾乃登才七毛乃落才八候たり

立秋昼五十分夜四十分  
至五十分夜四十分月令

八月

皇極經世一八月乃中八月の皇名仲秋也  
橋本徳と頼昌とよ八月の和名を月とよ本は  
いふらくは八月の在るを月と  
いふと略すなりと奥の細道に

朔日倍入紙と云今日たのそとて人よ物と道徳と

事ありたる根原よとてこれより又よ本候なり又  
西紀書をあらず世俗の風俗なり或假名記よ建長  
年号乃時よりい事ありたり先八田のそとよ  
と折敷やうもあつたよとて人乃よとてはつりたり  
とく又香明も大園れ又承の記よ世七八年より  
詳よ天下に流布せりとの事終つり海に建長  
此乃事なりたり或後よ法皇院つりて是を不  
て和威通方に代りたり時山田志とて  
さ久しきとてを智乃男女書よまじりけりよ  
事記よ聖徳太子の御記に嘉瑞たりて

内之罪さこのありきりなるとも、  
色たりつたり事、  
化を和明を、  
よりりるりなる、  
五形はくつる、  
つよりて何そ、  
然し海と、  
まゝいふ也、  
あゝいふ也、  
及ハズり、

一はたきまう、  
直云乃者、  
いりせら、  
らくそ、  
あつら、  
あつら、  
は事、  
とり、  
まう、

今事とらにた

の物終れ後より一々を以て始むる事一書久しき事  
不なる人信んぜんを以て延喜式に於て御事なるは是れ  
之深まむく國史にもあはれされはしうし是等  
皆り終る事根原乃後とわすことと一書久  
近せりて一書一信り長のりは善物終とて書う  
ふく色ハ物書る人の能くもとて一信り而  
色を以て一書久し今い書よ引周々考  
御事乃又今いそふ書よ一秋の國報乃の事  
とてよ出ぬ御事乃つわらとて一書久し  
あつと一書一信り一書久しと一書久し

月令廣義潜確類書を以て之を以て一書久し  
かりと終る事終る事終る事終る事終る事  
一書久し一書久し一書久し一書久し

○今日 禁裡より 將軍家より御物り又 將軍家  
より色ハ御物り終る事終る事終る事終る事  
十四日 明夜乃御物り終る事終る事終る事  
貴し一書一書一書一書一書一書一書一書

御事乃御物り終る事終る事終る事終る事  
御事乃御物り終る事終る事終る事終る事  
御事乃御物り終る事終る事終る事終る事

十五日 中秋より一書久し一書久し一書久し

今日の備言乃わたり中々致生身とすいし事人  
皇四十四代元正天皇乃所字貴徳仁年九月又大隅  
日向西園礼送すて九也母内裏より苑菜字休の  
の殿なるの禮宜幸徳勝波豆菜御軍と引率志く  
彼國と征し事成ずく敵と亡しきりるはら  
ハ徳乃の死室よは度の合戦多々人々と戦ひけり  
右殿を會とあはしむるに徳をましくこれハ徳國又  
よつてあまきくい敵とさくひひけりし一棟葉記に  
見えしよりさきくさきく徳乃所樂なるまいつり  
ての事しては後と行なり

此事のつくりを同徳とすしや終樂合編又  
日本八月十九日致生身皇百歳其樂有本國言  
簾を郭と志りてり年の中し奇合又新中細き  
世のつてははれおきくいしきるとさる秘伝を  
○今をさる秋は元中あき結よ月紙書ひのあま月夕  
とてこ五夕とてり年人證客乃勝と致ひの又さり  
林羅心孫植よとてく今秋月と致さる大さ事  
危れ世より書しりて得ん文人を歌やりしこと  
古樂府又嬉嬉怨乃あけり源人の中秋月并は  
よりいし書と能つと何の時を渡れせりりるあ事

月又のろくにはるし骨餅と聚してさくくの  
 懐に依り月餅と別しておとつり又月餅を瓜  
 等と合して看月金とをふるし月令廣義より  
 歐陽詹既月餅序云月之為餅其餅擊氣大之  
 別蒸重火契中散月其後入散与後但言既餅之  
 於時後夏先冬月於餅季如孟秋十五於既月  
 之中。魏晉於天運別定其均取於月數別燒皂園。况  
 煨燼不流大穴無し。錄備雜細地每上深昇其林  
 入西橋肌骨与之陳涼神氣与之清冷

○書之要云月歌よりく月若水之精神也金氣

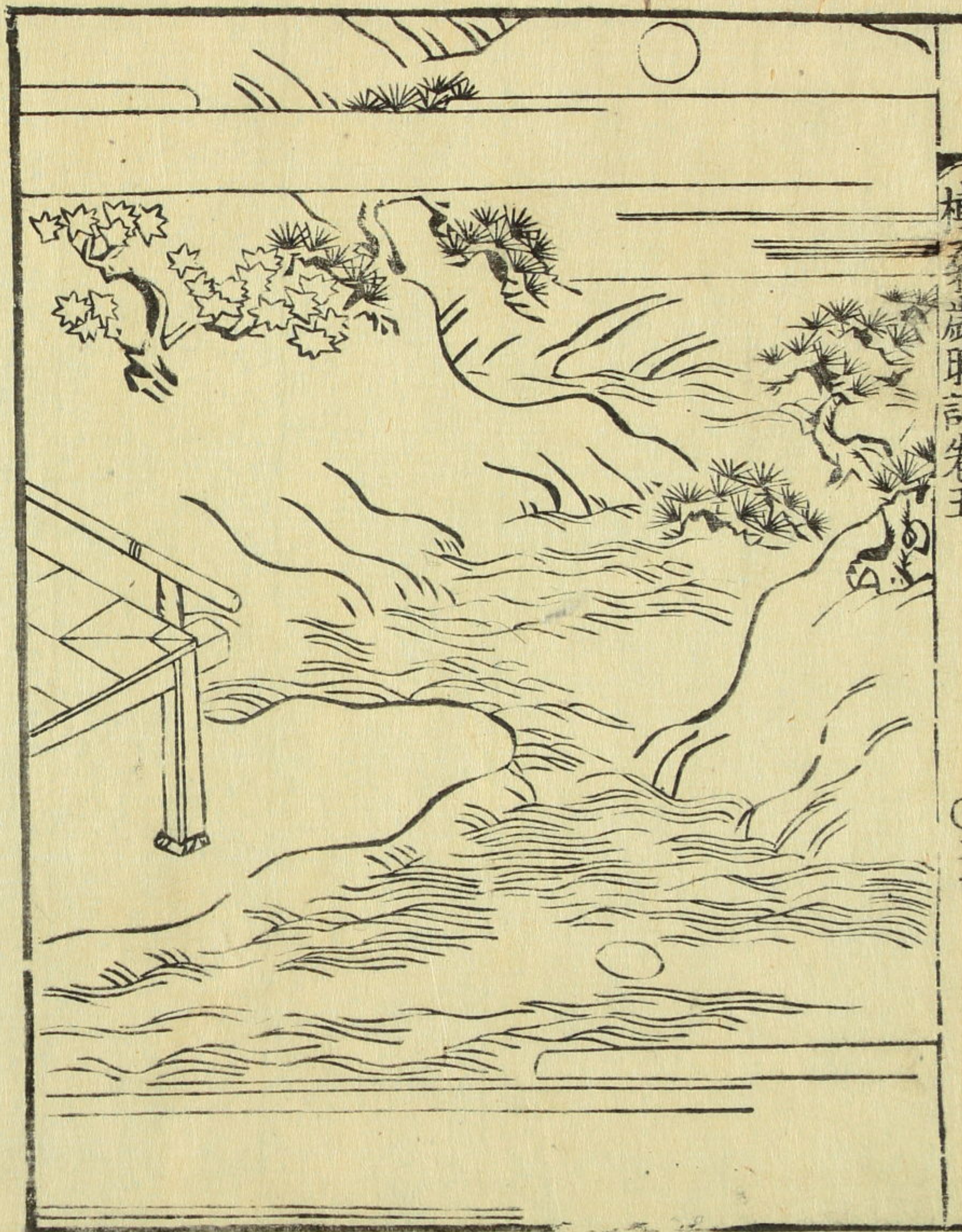
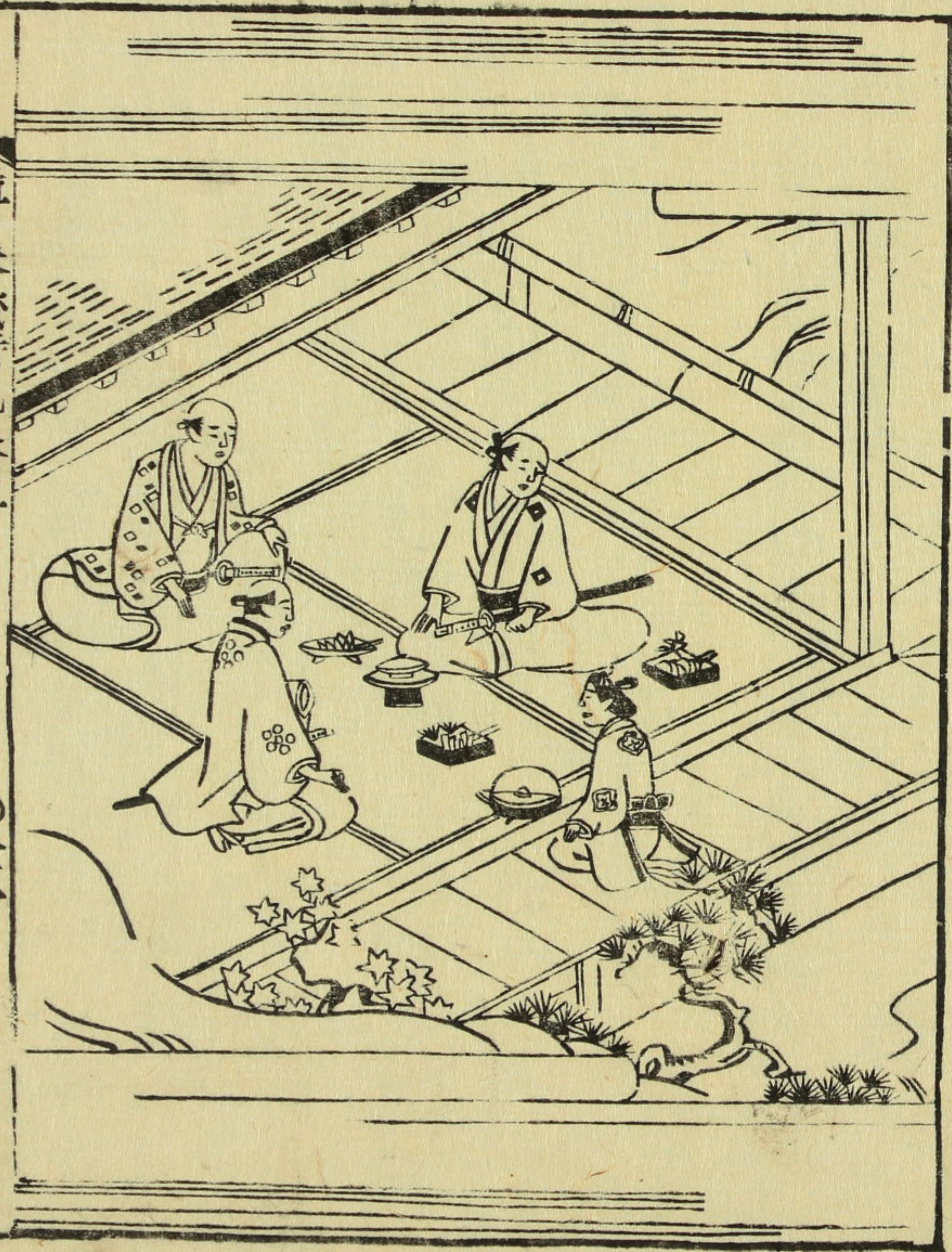
金水性也。其外分其事。別知天既。回。和感各一類。  
 水。金還蓋。月。固秋。多。清。氣。散。仗。之。物。人。惟。不。信。  
 後方合集。天房。乃。所。可。

月と云ふ月が事と月のおひの月と云ふ月うを  
 新勅撰集より中達法師

月と云ふ月乃中達法師の月と云ふ月と云ふ月  
 地乃一集より元家

月乃又博其事と云ふ月と云ふ月と云ふ月  
 金と云ふ月乃源新居房

月乃又博其事と云ふ月と云ふ月と云ふ月



張景安の中林乃得し

万の秋元掛玉盤櫻橋香の想ふに西河此月

曾そ邪人月今宵冷眼看

新号競く後

夜に池邊宿月生邪悲此夜易天明返雅引取

秋に水添入綱壺靴履更

抄子笑の續也

満目飛明鏡身折大刀轉蓬以地巻禁桂仰不

水路疑若雪林樹見羽毛此時睡白兔重欲數秋

邵康節の作

一年一度中林夜十度中秋九月法未滿玄須高

夜中萬明仍候到天心守重照更情非淡不

親時志多深流老古人詩句好何湛千里共

○今夜聖聖集と海の花雪のてそのりそ多しと

月令度教よんそつり又のそ牡丹と結一裁万事

今日しそ一常五の宜く候る代根と渾く造

香酒と心く造ハ九妙なり

二十七日孔子ハ生れ臨ハ日多しこれ孔子の夜あり  
はか夜候あり

晦日沐浴

そろくそく社日そく三秋乃後才又の成此日土乃

社とある所あり既二三月の節世俗禮とある所天と  
うらを祀ぬ世俗禮とある所天と  
せうき乃て日月乃を祀とあり社紙とわがきて  
いさ此族の祀とある所の多し此家淫祀とある所  
や乃て改とある所の多し此家の風俗と改と  
秋秋は社日此祭とあり事あり但此邦より九月此  
比比土地の社とある所を以て秋社とあり此  
志志を以てする社あり此淫祀多し此人の相里に  
ととある所の日かたれん農高代家より他社より志あり  
ぬぬも饗祭乃密多し此の祭は此の祭儀と財と  
費費あり此祭とや相りものあり此を以て依陽天國

中此祭日一日と用べしと命せらるる乞ふ人終法外  
左より一又世俗は八九月土地乃社とある所  
此と製して此密祭一親戚鄰里よとあり事  
ありを以てする社あり此の祭は此の祭儀と財と  
此は秋社の社儀社酒飲とあり事あり  
上旬小日と推して祭儀とあり  
此分乃日考此先祖此社とあり一なる祭二陰とあり  
より後陰氣日此祭一日をやらんくより社あり  
此の祭日此祭は此祭儀とあり一なる祭二陰とあり  
乃雨とあり一有りぬ



月半の辰野群の越報より  
 は月半の辰野群の人の新穀と業して往之の至るは  
 くらから親戚と客をへ  
 此月降風多の向人多く風を感して瘧疾と風を感  
 宅中より向より多く松葉青を前へ宅中より露後  
 くらく控りよふありし月半のゆりよしきよ又春  
 葛草茂獲より向の初前へ葛草のむくくゆり  
 西何よりし生れし二月にさうゆりゆりしゆり  
 此あり響響のあまのすく中秋のはむくし  
 夢よりさうしゆり九物ぬとまいたかむの土

わつこれのまかへし  
 一けい一まいたかむのゆり  
 一これれを苗よりし志をれとゆり  
 一此はれしゆり  
 一たおよのゆり  
 一てよく一ゆり  
 一取收垂し  
 一製したる業と脇して後蒸して肉と割さゆり  
 一ゆり  
 一ゆり  
 一ゆり

ころか性阿

正月草と採一なま其葉のくく凡採根多以八月採

秋枝葉採根津潤根下志秋採宜秋採宜秋採宜秋採宜

濕其葉也二月乃採

正月竹と三れの根竹竹と三れい不有竹竹竹

くく竹玉玉一元竹竹半半不不竹竹法法くく竹竹皮皮とと火

ああくく竹竹そのその煙煙ああくく竹竹ととああくく竹竹八八永永くく不不竹竹ままくく

苦苦差差釋釋乃乃灰灰汁汁くく洗洗りりををくく一一紙紙水水をを之之一一をを

皮皮一一たたるるをを出出ささすすゆゆらら幹幹後後柄柄矢矢葉葉木木刀刀等等のの葉葉送送

正月又又採採根根とと收收まますす一一布布とと用用くく一一紙紙水水とと用用くく一一布布

と染とををくくくく外外用用すす

此月天天氣氣漸漸冷冷なりなり多多くく生生果果とと食食みみかからら次次生生蒜蒜根根採採

生生蜜蜜餠餠子子蟹蟹とと食食みみかからら又又萌萌芽芽とと食食みみかかららをを忌忌

考考をを以以書書すす月月令令重重及及七七藏藏よよくく以以紙紙片片法法採採乃乃

流流泉泉とと飲飲事事かかららいいんんをを一一疋疋脚脚軟軟とと行行せせむむ

八月の八月月のの大大候候才才一一箇箇厚厚氣氣才才之之氣氣漸漸冷冷才才之之氣氣漸漸冷冷才才之之氣氣漸漸冷冷才才之之氣氣漸漸冷冷

着着たたららばば霜霜乃乃三三候候才才中中にに雷雷如如收收粟粟才才五五穂穂

粟粟垣垣戸戸才才去去水水如如酒酒古古秋秋分分乃乃三三候候才才りり

白露白露登登五五十十刻刻十十分分夜夜四四十十七七刻刻五五十分分秋秋分分登登五五十十

刻刻夜夜五五十十刻刻月月令令度度最最

九月 意義ハ九月の蓋新曆ハ九月の中ハ九月の蓋ハ新曆故也

蘇形 標と新曆との九月の蓋ハ新曆故也

朔日 今日 一八日 ますく 給衣と云

八日 休活

九日 新曆と云月と日と二かり 老湯乃 數ノ 勢

イカクハ云のり又新九と云の 田信 今日 一 勢

是又 今日 粟子飯と食い 菊花酒とのむらり

何の乞と 新湯乃 數と云の 勢と云の 勢と云の 勢

ある母り... 今日... 勢と云の 勢と云の 勢

新湯乃 數と云の 勢と云の 勢と云の 勢

死すのち房これと中をこれ海命とわたり中  
 入り世代人九月又入り毎入少よむと為海との  
 婦人菜黄囊と常らまけあかかん  
は後を越好あ  
住すかすは五  
 猪紐はつとく九月菜黄と佩ひききよりかり菊糸ゆとのむ結て  
費古房極系よ実と遊の機と教つとくよりれ本中とほされを  
西系雜記は賤史人の俗見賈佩蘭中記有りて九月九月蓮解  
と食ひ菊糸ゆとのむゆすれい人をしてあまなりしははるわい  
下りはてしても他とあて飲と倍多の淫れ  
ためしててはるかり極系よ始つたなり 又月令廣義は仙書  
 と引てその菜黄と辟邪氣と菊糸と延壽  
 客とにあら九月は二物とかりて防九の厄と消  
 せ海とあかん悪草とくをば後修徳とすりれたる  
 周書の周書は九月九月律書射の率り數九を

るあよ俗にけいと尚んく菜黄房とけて改  
 挿む乞悪氣と辟除して初室とあせくさまり  
 とすく是なりん西記たりん又今日菊糸ゆとのむ  
長壽あかん心も知法菊糸舒る時花を盡家と  
 其よ春來にまぐりてこれと穢し來年九月九月  
 或く取あしてこれと穢なこれと菊糸ゆとのむ  
 菊糸雜記よるをとり  
 ○五五世代中人日と津く上邑熾平と夕夕陽八中  
子舟をも葉とる西代俗名ありて十月日ら肌赤よ  
去く陽教よあつとそれりこれ古入陽と尚

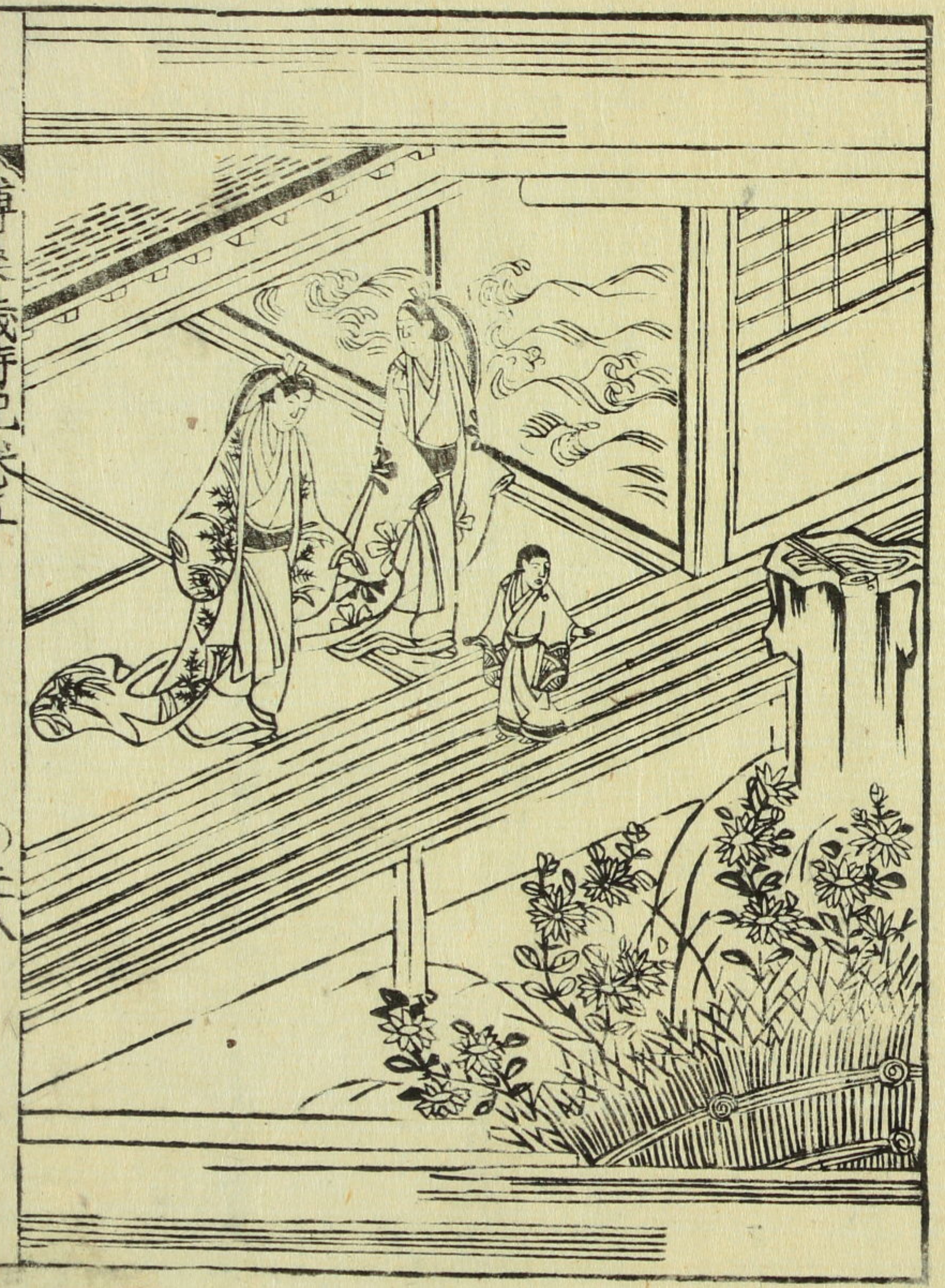
なりと昔の事なりて下り世に下りては後世に下りては昔人  
の事なりと下りて下りては下りては下りては下りては下りては  
と下りては下りては下りては下りては下りては下りては下りては  
ては下りては下りては下りては下りては下りては下りては下りては

後平載集より新院別当典俗

以来代傳法をて九をいふ代をていふれは世に下りては  
家傳百をいふ家

古月やまよと下りては代をていふれは世に下りては  
張其受りては下りては下りては下りては下りては下りては下りては

一尺の花は只日羞蕭猶短髪を不替新法に為る也



烏紗帽猶侍西風海眼愁

越約月九日乃侍上

履齒臨翻印淡波之亮月落帽簪斜西風眼愁

備黃髮髮絲上世公在菊多祀

杜牧九日秋心少多乃侍小

江漸秋氣厚初志與空機垂上翠微之世冠蓬

翠石笑菊菊新顏插滿院歸他機破可疎佳節

不用心之怒落暉在何今身已出此年山何必

猶沾衣

○今日菊多祀代多菊乃一也味甘之也而一菊之園

菊也九月一也一秋亦九月一也月令廣義に云

十日四倍今日一り是秋とくく二月晦日一り終る也

と云ふより乞まの終るなりす

十三日 倭俗今青月紙書の事一中秋れとく一吉田

善如く後より八月十六日九月十三日ハ婁宮よりけ書

法明なるれく月と敬ふ良有とすやんさり共れ

こそは祝他れおととくは牛新と深く考より

又月身大小あまはらぐらるる健とすりたてす元秋

を月と美さるる時あり中庭をりろくく月と書す

不佳菊とせり我國又九月十三夜と用く月紙書



これの年月よりまたねもせきやんをいへりや

後系忠通号性寺殿九月十三夜数月待よ

用惣寂号性寺殿月杪院属寂秋を匡持号性寺殿寂号性寺殿

寂号性寺殿物持家持号性寺殿経済号性寺殿平和号性寺殿好十二夜号性寺殿静勝号性寺殿於号性寺殿

寂号性寺殿年号性寺殿完号性寺殿不号性寺殿累号性寺殿公号性寺殿持号性寺殿信号性寺殿前号性寺殿行号性寺殿回号性寺殿首号性寺殿見号性寺殿法号性寺殿州号性寺殿世号性寺殿文号性寺殿價号性寺殿平号性寺殿全号性寺殿

晦日 沐浴

は月部遊して血脈を割之

上旬小中まとう下旬に大まを前へ一まを秋うま

を變とる秋四附の氣とうくはと月令度義より

地肥饒号性寺殿寺号性寺殿る号性寺殿取号性寺殿る号性寺殿ま号性寺殿く号性寺殿う号性寺殿ゆ号性寺殿ま号性寺殿の号性寺殿甚号性寺殿整号性寺殿養号性寺殿ま号性寺殿く号性寺殿る号性寺殿也号性寺殿

十月以後十二月初まぐちく

元菜とと向し九月の末より九月の終へ十月以後

株ものハ強乾してよりと向するより九月の末より

を煉とる葉の日に乾し冬をまとる葉ハ強乾してより

さより他世に極落葉前葉からをきとる久しく烈日

小やせの氣うまくなるのむえんとはより附るやん

陰より干へ

は月牡丹芍薬及竹法果木とて一様とてと月

令度義よりええより農政全書よりく元果木とて

ゆる小やせ九月乃中此後樹のまわりとありて繩と



ゆくまのりとかうけりたるりとおの肥土を入水と焼へ

一決年正月二月二種穀へ（まて三月の）

い月梨と收（さき）へ一（まて）月今度穀のいらくを最後一粟と

取水多の肉よ入とくうくものを去日おり一油と

炒と冷一穀壹よ入油一を粟一を焼くよ焼く一壺

また一二石入の多きいり一竹葉と焼くいり

と竹片おしり乃どくたの和あきいと焼くてされ

いかる地一たれ壺とくうつむきたままり酒壺よら

つららありれ又塩水一二粒浸しぬお一日一

胡麻と拌（まぜ）せ穀入壺へ一こそ又（まぜ）山の中乃壺への

ぼよの生粟と二月日小り一も後能考く又日小

壺よ收（と）ととら壺へ出くうりて味（あじ）あるくとり

又大粟と生あき餅一壺よ大粟乃芽生まるとる壺

やとらひとあて壺よ入を壺よちやうりかこれ（う）

用まの巾一粟汁出やど小壺と一あけ壺の口

小ためさうさ海（う）なる一（の）方と焼く付壺へ一芽

生せす久一くこゆりあり又赤土と煮入を

肉よう（う）壺くもす

は比米穀と求貯へ一用多

水月量と食るやられ痼疾（あ）とがはの毒とくへ穢と



